

共立女子大学博物館所蔵－資料名「各種 名物裂」に関する研究： 裂に付される紙札について

丸塚 花奈子

1. はじめに

共立女子大学博物館には、本学創設（1886年）以来、長年に渡って収集されてきた美術工芸品が収蔵されている。コレクションの中心をなすのは日本の服飾資料と工芸品で、さらに西洋の服飾資料や工芸品、美術品に至るまで、その数は3,000点に及ぶ。これらの収蔵品はこれまでも学生のための教育資料や教員の研究資料として幅広く利用されてきたが、昨年の開館を機に一般にも広く公開され、従来以上の活用が期待される場所である。また一方で、収蔵品の一部には未だ十分な調査が行われていない資料が存在しており、新たな研究対象としての可能性を大きく含んでいる。

本稿では、本号所載の古川咲「共立女子大学博物館所蔵－資料名「各種 名物裂」に関する研究：作品概要」に引き続き、これまで十分な調査が行われてこなかった収蔵品のひとつである、本学博物館所蔵「各種 名物裂」の調査結果を報告する。今回調査した裂類145点の多くには、和紙製の紙が付けられており、様々な情報が墨書あるいは朱書されている（図1）。本稿では、これらの情報を整理しながら、本資料の紙札がいつ頃付けられ、いかなる役割を果たして来たのかを明らかにしていきたい。

2. 「名物裂」の概念の成立と広がり

本資料の名称にもなっている「名物裂」という概念が成立したのは、遅くとも江戸時代初期であるといわれているが、現在その定義は様々である。一般的にもっとも普及している概念は、海外から何らかの経緯で日本にもたらされた舶来染織品で、しかも舶来時期がおおむね14～17世紀頃であること、及びそれらが主に茶道具の袋や包み、掛幅の表具など、茶道に用いられたこと¹である。

茶道が確立し、掛幅のみならずそれに用いる茶碗や茶入等の道具類までも鑑賞の対象となるのは南北朝時代であるが、この時点ではこれらの茶道具を包む裂類に対する関心はほとんどなかったといわれている²。やがて桃山時代になると、茶会の内容を記録した茶会記に、掛幅の表具や仕覆について、裂の種別や模様についての具体的な記述が見られるようになる。

さらに、江戸時代中期になると、これらの各裂を「時代裂」と呼ぶようになり、その後、松平不昧によって寛政元年（1789）から9年間にわたり編纂された『古今名物類聚』の最終巻「名物切之部」に、はじめて「名物裂」と題してこれらの裂類が集大成された。ここに収録されている裂類は、寛政初期頃までにすでに「名物裂」として認識されていたものを整理したもの³であるとされている⁴。

一方、現代において名物裂の概念としてもっとも広義なものは、茶道に用いられた裂地であれば、必ずしも舶来品でなくとも名物裂と呼ぶ⁵というものである。本資料には、18～19世紀頃に日本で制作されたと考えられる、いわゆる「和物」と呼ばれる裂も多数含まれる。これら日本製の裂は、舶来裂を模織した「本歌写し」と呼ばれるものや、舶来裂の技法を用いて似た模様を模したものなど、前述の広



図1. 裂地に付けられた紙札

- 1 長崎巖「名物裂の概念の成立と受容の実態」、共立女子大学総合文化研究所紀要、21、2015、p.45-59
- 2 長崎巖「日本の染織文化における名物裂の意味」、月間装道、18（10）、2010、p.22-25
- 3 茶道に用いる裂類における固有名詞の発生は、その裂地の所有者の名を付したり、裂地で包んだその茶入の名を冠して呼んだりしたことに由来している。
- 4 前掲書1）参照
- 5 前掲書1）参照

義の名物裂の概念に相当するものである。

3. 紙札の分類

調査した資料 142 点のうち、紙札が取り付けられている資料は 110 点に及ぶ。資料 1 点につき紙札 1 枚が付けられているものだけでなく、複数枚が付けられている場合もあり、紙札の付け方に規則性は見られない。紙札は、用いられている和紙の大きさや厚み、筆跡からいくつかのグループに分けることができ、それぞれ異なる時期に付けられたものと推測できる。これらの紙札には、①模様、②裂の種別、③「古渡」、「中渡」、「近渡」といった裂の年代、④「上」、「中」、「並」、「下」といった裂の格付け、⑤番号、⑥掛目などの情報が、いくつかの組合せで記されている。

まず、紙札の大きさや用いられた和紙の質感、筆跡、記載された情報の組合せから分類を試みた。その結果、表 1 に示すような 5 分類となった。なお、表で明らかのように、それぞれの紙札がこれらの情報のすべてを有しているわけではないが、紙札の大きさや質感、筆跡などから総合的に分類している。また、これら以外の紙札や、裂を包んでいる紙類、裂の小片を入れた紙製の小袋などにも、全てではないが上記の情報が記されており、本研究ではこれらを補足資料とした。

以下、5 種に分類した紙札の特徴について述べる。

表 1. 紙札の分類と記載情報

紙札分類	寸法 (cm)	①模様	②裂種別	③時代	④格付け	⑤番号	⑥掛目	資料数	備考
A	13.1×3.0	●	●	●		●	●	22	
B	7.5×2.4	●	●		●	●	●	27/56	
	5.3×2.4					●	●	29/56	
C	11.7×3.1		●	●		●	●	26	
D	13.2×2.7	●	●	●	●	●		24	
E	19.1×5.0	●	●	●		●	●	24	仮名文字+番号

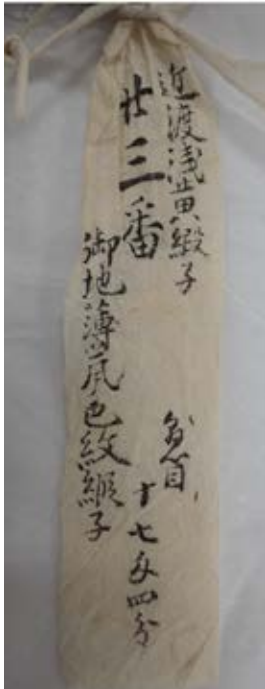


図 2. < A > 名称を記した紙札 (調査番号 3)

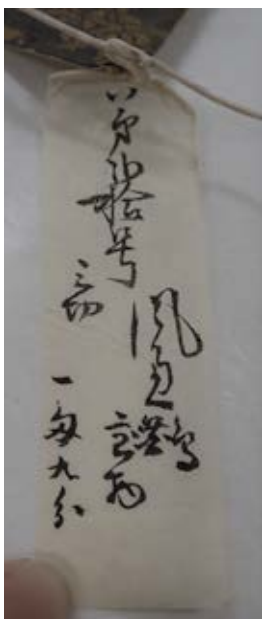


図 3. < B > 番号・掛目を記した紙札 (調査番号 34)

< A > 名称を記した紙札 (図 2)

全資料のうち 22 点に付けられている。札の寸法は紙札 D とほぼ同様である。主な記載情報は、①模様・②裂種別・③時代・⑤番号・⑥掛目であり、比較的楷書体に近い文字で書かれている。このうち、③時代に関する記述は、「古渡」・「中渡」・「近渡」・「黒船時代」のほか、「名物」とする場合も含め、16 点に確認できる。④格付けは、「極上」・「中」・「下」に分類されているが、これが書き込まれたものは少なく、4 点のみである。

< B > 番号・掛目を記した紙札 (図 3)

全資料のうち 56 点に付けられており、分類した中でもっとも多い。このうち 27 点には、①模様・②裂種別・④格付け・⑤番号・⑥掛目が記されているが、29 点には、⑤番号・⑥掛目のみが記されている。④格付けには、「上」・「中」・「並」・「下」がある。寸法は 5 種類の中でもっとも小さい。

< C > 「亀吉」と記した紙札 (図 4)

26 点に付けられている。他の紙札に比べてやや厚手の和紙を用いている。「亀吉」

と墨書されており、これはこの紙札を取付けた人物の名であると考えられる。主な記載情報は、②裂種別・③時代・⑤番号・⑥掛目である。このうち、③時代は「古渡」・「中渡」・「近渡」と「和物」に分けられ、このグループに分類される紙札すべてに時代についての書き込みが確認できる。また、⑤番号の書き込みのある16点のうち7点に朱書による番号の訂正が認められる。また、この紙札には①模様の記載がなく、②裂種別のみ書かれていることから、他の紙札の情報を見ながら情報を付け加えたものと考えられ、比較的新しい時期のものであると推察される。

< D > 「黒川極」と記した紙札 (図5)

24点に付けられている。この紙札には「黒川極」と書かれていることから、黒川という名の人物が最終的に記した情報であることが分かる。主な記載情報は、①模様・②裂種別・③時代・④格付け・⑤番号である。④格付けは、「中」・「並」・「下」に分類されている。24点のうち5点には、Cの紙札と同じ「亀吉」と書き込まれている。

< E > 仮名番号を記した紙札 (図6)

24点の資料に付けられており、5種の紙札の中でもっとも寸法が大きい。また、番号表記が平仮名と数字の組合せである点も、他の紙札とは異なっている。主な記載情報は、①模様・②裂種別・③時代・⑤番号(仮名文字入り)・⑥掛目である。③時代は、「古渡」・「中渡」・「近渡」・「黒船時代」となっている。

4. 紙札が取り付けられた時期に関する検討

本項では、紙札の記載情報をもとに、5種の紙札がどのような順序で付けられたのかを検討する。検討項目は、番号・掛目・加筆情報の3点である。

4-1. 番号からの検討

調査番号97「茶地蓮唐草模様金襴裂」には紙札A及びBの2枚の紙札が付けられているが、紙札Aには「中 黒船時代 縹子地金入/共十六番四十九/懸目六毎二十匁」、紙札Bには「四十九号/中/縹子金入」と記されている。これは、紙札Bを付ける際に、もともとあった紙札Aの番号を修正したことを暗示しており、このことから紙札が付けられた順序は、A→Bの順であると推察できる。

4-2. 掛目の値からの検討

「掛目」とは、一般的には秤にかけてはかった重量のことをいう⁶。資料には掛目を記した紙札を2枚付けた裂があり、この掛目の値が1点を除き、すべての2枚の紙札で異なっていることから、この値の大小を比較することで両者の前後関係を明らかに出来ると考えた。

その前に、紙札に書かれた掛目が本当に重量を表わしているのかどうかの検討が必要がある。まず、紙札に書かれた掛目に用いられている単位は匁と分

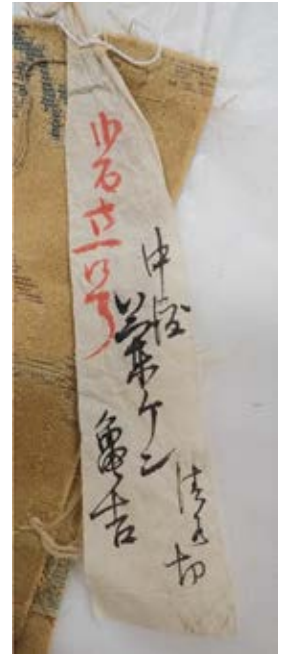


図4.< C > 「亀吉」と記した紙札 (調査番号54)

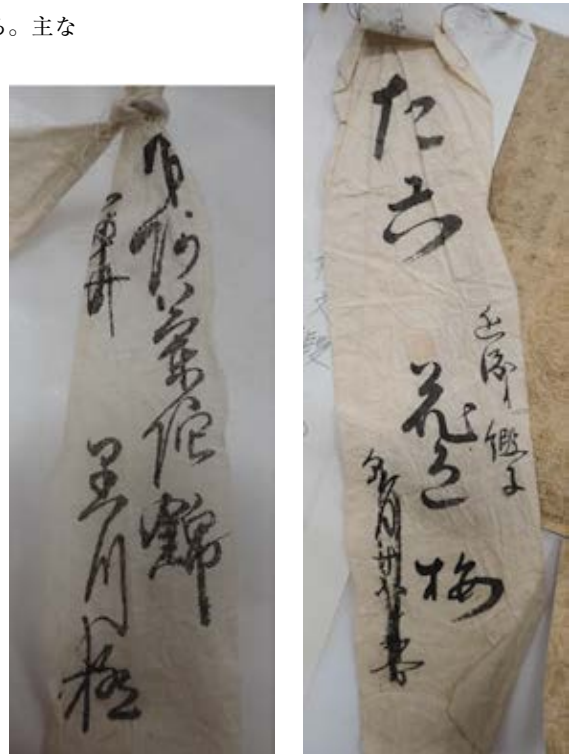


図5.< D > 「黒川極」と記した紙札 (調査番号84)

図6.< E > 仮名番号を記した紙札 (調査番号46)

6 新村出編『広辞苑』第3版、岩波書店、1988、p.431

7 下川歌史編『明治・大正家庭史年表』、河出書房新社、2000、p.40

である。これらの紙札が付けられた時期を江戸時代と仮定すると、当時の貨幣制度における銀貨の単位という見方もできるが、紙札 A・E には「黒船時代」と記述するものもあることから、これら 2 種の紙札は明治以降に付けられたと思われる。これらの紙札にも掛目が記されていること、また、明治 4 年 (1871 年) 5 月には新貨条例が布告され、通貨に円・銭・厘の使用が始まる⁷ことから考えると、紙札の掛目は裂地の重量を表わしていると推察される。詳しくは後述するが、本資料と類似する前田家伝来名物裂 (京都国立博物館蔵) に付けられた札に裂の寸量と重量が書かれていることから見ても、本資料における掛目は重量で間違いなであろう。なお、1 匁は 3.75g、1 分はその 10 分の 1 の 0.375g である。

2 枚の紙札に掛目が書き込まれている資料を、掛目の値とともに表 2 に示す。

表 2. 紙札に書かれた掛目の値 (同一資料に 2 つの掛目の情報がある資料)

調査番号	作品名	法量 (タテ×ヨコcm)	《A》		《B》		《C》		《D》		《E》		
			翻刻	掛目	翻刻	掛目	翻刻	掛目	翻刻	掛目	翻刻	掛目	
18	紺地桐大紋様縞子裂	不定形 149.0×61.0					和物 百八/縞子/ 三十四匁/亀吉	34匁				た四/近邊り縞子/ 紺地桐大紋/懸目 三十九匁四分	30匁 4分
21	綴綺菊唐草模様金襴裂	22.0×5.6	中近邊縞子地縞金 入/百十五番/掛目 六匁	6匁			中濃/武匁/七十五 (朱)/筋金襴/亀吉	2匁					
30	紺地縦縞模様縞裂	22.0×6.0 3.9×2.7 23.5×1.1	和物機留縞子地紺 地縞/十六番/掛目 廿八匁/御地紺菊 花縞紋	28匁					下/口/ろ口三/ 縞留/三切一匁二 分/黒川様	1匁 2分			
88	茶地象形模様縞裂	72.8×62.0			四号/中 風通/廿 四匁五分	24匁 5分						ぬ三/中濃/茶地口 モウ口/懸目十二 匁八分	12匁 8分
99	紺地卍字小花環紫模様縞裂	87.4×63.5					百四(朱)/中濃/武 十八匁/シチン/亀 吉	28匁				つ四/近邊縞珍/花 色口口口/懸目三 拾九匁/六口/内口 口/中前口と口/口 口武拾九匁	39匁/ 29匁
100	茶地蓮宝尽くし模様金襴裂	75.0×43.5							並 中濃/七十八 縞金/亀吉/間断/ 廿五匁/黒川様	25匁		れ九/近邊縞金/縞 茶地蓮宝草/懸目 十匁七分	12匁 7分
105-2	茶地花模様縞子裂	52.5×64.6			百五拾一号/中/縞 子/十一匁	11匁						ね十一 中濃縞子 茶口口紋/掛目/ 武拾七分	27分
107	①茶地変わり蜀江模様風通裂 ②茶地梅花模様風通裂	159.4×55.0			拾号/中/風通/三 十五匁	35匁						ぬ香/ぬ香/武拾七 匁六分/内口口縞 様/口口武拾七匁 六分	27匁 6分
113	黄地下がり藤丸高文散らし模様縞子	150.0×63.7					中濃/廿六匁五分/ 縞子/亀吉	26匁 5分				よ六 近邊り縞子 黄茶蔦大紋/懸目 武十七匁五分	27匁 2分
138	茶地牡丹入角模様金襴裂	89.0×60.9			五拾七号/中/金襴 /武十匁	20匁						ら四/金入柄地縞 子内牡丹大紋/掛 目 四十	20匁
139	白地唐草模様金襴裂	160.1×54.8					近邊/寛永頃/口金 百四一/七十匁 亀吉	70匁				か四/近邊縞子地 ヨリ金入/白地唐草 /懸目六十匁	60匁

まず、紙札 B と紙札 E について見てみると、該当する 4 資料 (調査番号 88, 105-2, 107, 138) のうち、3 資料において紙札 B の掛目が紙札 E の値を上回っている。掛目を裂地の重量とすると、これらの裂を使用したことで掛目が小さくなったことになる。このことから、紙札 B は紙札 E よりも先に付けられたとすることができる。

同様に紙札 A と紙札 C (調査番号 21)、紙札 A と紙札 D (調査番号 30) の関係について見ると、いずれも紙札 A の掛目の値の方が大きい。よって、これらが付けられた順序は紙札 A → C・D となる。

調査番号 100 では、紙札 D の値が紙札 E の値を上回っていることから、紙札 D → E の順序で付けられたと考えられる。

最後に、紙札 C と紙札 E の関係であるが、該当する 4 資料のうち、紙札 C の値が紙札 E を上回っている資料が 2 点 (調査番号 18, 139)、紙札 E の値が紙札 C を上回っている資料が 2 点 (調査番号 99, 113) あり、両者の関係性は明らかではない。

4-3. 加筆情報からの検討

「亀吉」と記した紙札 C と「黒川極」と記した紙札 D の関係性が見て取れる資料が 4 点確認できた（調査番号 81, 100, 124, 132）。これらはいずれも紙札 D の余白に「亀吉同断」と書かれている（図 7）。ここから、紙札 D に書かれた「黒川」の下した見解に対して、紙札 C を取り付けた「亀吉」という人物が同様の見解であることを示すために書き加えたものであると判断できる。よって、両者の紙札が付けられた順序は D → C となるが、両者が取り付けられた時期はさほど離れていないと思われる。

以上、紙札が付けられた順序に関するこれまでの結果をまとめると次のようになる。

番号からの検討：A → B

掛目からの検討：B → E / A → C / A → D / D → E

加筆情報からの検討：D → C

よって、この 5 種類の紙札が付けられた順序は、A → B → D → C → E であると考えられる。

これらの紙札が付けられた時期は、先に述べたとおり、紙札 A・E に「黒船時代」と書かれた札があることから、いずれも明治時代以降であると推察される。さらに、調査番号 78 「茶地唐花唐草模様緞子裂」の包み紙（分類外）には「大正三 十月六日勝矢より納入」という墨書があることから、このような紙札や包み紙に裂の情報を書き込むという行為が、明治時代から大正時代頃に行われていたことは間違いないであろう。

また、本資料のうち、紙札 A・C には「和物」と書き込まれたものがあり、日本製の裂地を他の舶来裂と同様に名物裂として扱っている。このことは、これらの紙札が、先述の名物裂の概念に広がりが見え始めた時期に付けられたことを示している。

5. 裂の種別および時代と格付けとの関係性

紙札のうち、裂の格付けについての記述が見られるのは紙札 A・B・D であるが、これらの格付けが何に基づいたものであるか検討する。検討事項として考えられるのは、②裂種別と③時代である。

まずは、②裂種別について検討する。名物裂において重視されるのは、金欄・緞子・間道の 3 種である。現代では金欄が第一とされる場合が多いが、『古今名物類聚』では、金欄と緞子の順序が逆転しており⁸、当時の茶人が現代とは異なる価値観を持っていたことが分かる。これは、名物裂の主な使用の場であった茶道において確立された「わび」「さび」の精神が、煌びやかな金欄よりも落ち着いたいて上品な緞子を重要視する傾向にあったためである⁹。

裂種別はほとんどの紙札に書き込まれている。このうち、②裂種別と④格付けの双方が書かれた A の紙札に見られる裂種別は、緞子・縹子・錦・かんとう（間道）、金入・銀入と表記されている金欄や銀欄などである。格付けが書かれた資料には、同じ縹子であっても「中」とされるもの（2 点）もあれば「下」とされるもの（1 点）

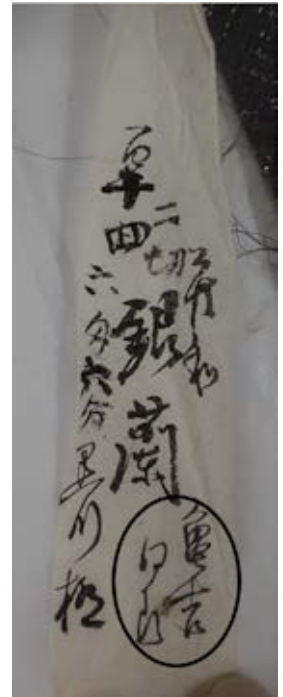


図 7. < D > 「黒川極」と記した紙札に「亀吉同断」と書かれた例（丸枠部分、調査番号 81）

8 前掲書 2) 参照

9 小笠原小枝『染と織の鑑賞基礎知識』、至文堂、1998、p.202-206

もあり、裂種別そのものは格付けに影響を与えていないようである。

また、一枚の裂に③裂種別を記した紙札と④格付けを記した紙札をともに付けた資料について、「中」の格付けを記した紙札Dを伴う紙札Cの裂種別を確認すると、緞子3点・風通1点・縞子1点・金襴1点・紹金1点・金入1点である。次に同じく「並」と記した紙札Dを伴う紙札Cを見てみると、金襴3点・シチン（縞珍）1点・紹金1点・紗金（金紗）1点・緞金1点・緞子1点・唐緞子1点・銀襴1点である。同様に紙札Dの「下」を伴う紙札Cは、緞子2点・シチン（縞珍）1点・錦1点である。これらのことから、紙札に見られる格付けの決定に裂種別は影響していないと考えられる。

次に時代について検討する。まず、紙札に記された「古渡り」「中渡り」「近渡り」というのは、名物裂の舶来時期を示す言葉である。時代概念を表すのに、このような言葉を使用していることは、本資料が名物裂として認識されていたか、あるいは茶道の概念のもとで管理されていたことを示している。

名物裂の格付けにおいて、時代の古さが第一の要素である¹⁰ことを考えると、本資料の紙札に書かれた時代が格付けと関係していると考えるのが妥当である。さらに、名物裂とは舶来裂であることが前提であるため、日本製の裂（和物）はそれらよりも当然ランクが低くなる。同一の紙札に時代と格付けが書かれた資料は4点と少ないため、一枚の裂に付けられた2枚の札に記された時代との整合性も含めて検討していく。

まず、紙札Aにおいて、③時代と④格付けの両者が書き込まれているのは調査番号21「縦縞菊唐草花入菱繫模様錦裂」、調査番号37「薄茶地花亀甲唐草獣文字模様緞子裂」である。調査番号21では時代を「近渡」、格付けを「中」としているが、調査番号37では時代を「近渡」、格付けを「下」としている。これは、格付けが単純に時代を反映したものではないことを示している。

これは紙札Bについても同様であり、調査番号34「納戸地花鳥宝尽くし模様錦裂」は、時代を書くところを「和物」としながらも、「上」という格付けを行っている。

また、同一の紙札に記されたものではないものの、一枚の裂に付けられた紙札Cと紙札Dについて見てみても、紙札Dの格付けと紙札Cの時代には関係性が見られなかった。

以上のことから、紙札に書き込まれた格付けは、裂種別や時代だけで判断されたものではないことが分かる。

文化元年（1804）刊行の『和漢錦繡一覽』には、名物裂342種が収載され、それぞれの名称と時代が記されている。そこには、「極上代」「上代」「時代」「中古」という区分があり、それぞれの裂が当時から見て何年前に製織または舶載されたかが示されている。極上代が700～300年前、上代が500～200年前、時代が300～100年前、中古が200～100年前と分けられ、原則として時代の古いものほど高い価値を付けているように思われるが、時代ごとに明確に区分される訳ではない。また、「漢島部」に出てくる「彌右衛門」という名の裂の説明には、「白糸ニテナ、コアルハ上々ナリ横ニウキスシ多キヲ上品トス」とあり、同じ彌右衛門でもさらに品質により格付けがなされていたことが分かる。

このように、名物裂の格付けは、裂種別や製作年代、裂の由来といった名物裂

10 小笠原小枝「金襴」、至文堂、1984、p.41
（日本の美術、9）

としての基本的な要素によって総合的になされ、加えて、裂地そのものが持つ作柄や品質にも影響される。さらには、購入時の価格といったように、実用的な面からの判断も行われたと考えられる。本資料における格付けも、基本的には同様に行われたと考えられるが、現時点ではそれを究明するに至らなかった。今後さらなる調査を要すると考えている。

6. 考察

本項では、本資料と類似資料との比較を行いながら、本資料における紙札の役割について考察を行う。

まず、前田家伝来名物裂（京都国立博物館蔵）には、裂を包む畳紙や畳紙に貼付された貼札、裂に付けられた札等に、番号・模様・裂種別・数量・格付けが墨書や朱書で書かれていること、裂地の大きさが様々であることなど、本資料との類似点が多い。前田家伝来名物裂の場合、畳紙に番号、模様あるいは裂名称、裂種別と格付け、裂の数量等が書かれている。また、付札のほとんどには法量と重量が記載されており、一枚の裂に対してこれが複数枚付けられている場合もある。

また、女子美術大学美術館所蔵の名物裂には、軸木を芯に名物裂を巻き、表面を白紙や柿洪紙で覆ったものがある。覆い紙の表書きには、番号、模様、裂種別、数量などが墨書されているが、この墨書の形式から、この資料は近世以来の名物裂保存の体裁を留めていると考えられている¹¹。また、覆い紙には墨書のほかにも番号が書かれた複数の貼紙が貼られており、これらは裂類を点検する度に新しく貼られていったものだと推測される。

以上ふたつの例においては、畳紙や付札、あるいは覆い紙に記された情報は、将来使用する可能性があるこれらの名物裂の保管・管理のための情報であると考えられる。本学所蔵の本資料に付けられた紙札にもこれらと同様の情報が記されていることから、紙札を付けた目的のひとつが在庫管理であったことが分かる。

さらに、江戸時代の大坂の両替商として知られる鴻池家善右衛門家に伝来した鴻池伝来裂類（鴻池コレクション、大阪市蔵）の多くは、年月や法量、裂名称などが書かれた付箋が付けられている¹²点で、本資料と類似している。さらに、鴻池伝来裂類に関連する資料である「袋切表具切之控」（鴻池合資会社資料室蔵）には、個々の裂の情報が記載されている。記されている内容は、裂名・数量のほか、茶道具の袋や表具といった使用目的、あるいはそれらの補修といった使途である。

一方、本資料においても、分類外の紙札に、「天目／袋／遣（調査番号17）」や「十四年六月十四□／御茶入御用遣（調査番号110）」、「十四年六月十四／天目台御入用（調査番号130）」のように、裂の使途が推定できる記述が見られるものがある。これらはそれぞれ茶入や天目台の仕覆に用いられたと考えられ、先に述べたような名物裂の概念に当てはまるものであったことが分かる。そしてこれらの紙札の役割のひとつが、鴻池家の「袋切表具切之控」に見られるような裂地の使途の記録であったと考えられる。

以上のことから、これらの裂類はもともと実用を目的として収集されたものであり、紙札は裂類の在庫管理や使途の記録のための覚書であったと推察される。

ところで、名物裂に関連する資料の中には、『古今名物類聚』などの名物裂を整理した集成本や、実際の裂地を張り込んだ裂帳が数多く存在する。これらの誕生

11 切畑健、吉岡幸雄編著『名物裂帖』、毎日新聞社、1988、p.112～117、p.195（鐘紡コレクション5）

12 中野朋子「袋切表具切之控—鴻池家における名物裂の蒐集と利用—」、大阪歴史博物館研究紀要、第13号、2015、p.105-124

には、茶道における裂類に対する価値観の変化が関係している。前項でも述べたように、南北朝時代、茶道具が鑑賞の対象となっても、それらを包む裂地に対して茶人の関心が向けられるまでになるには少し時間を要し、桃山時代を待たねばならなかった。やがて江戸時代になって裂地にも賞玩や鑑賞の目が向けられるようになると、茶席における茶道具の拝見において、名物裂に対する知識が必要となった。茶人達はそのために古裂を収集し、裂帳に貼り込んで整理するに至ったのである。

本資料は裂帳としての形を呈してはいない。裂地の大きさも、1mを越える長さのものから、2～3cm四方の小さな断片まで様々である。紙札に書かれている内容は模様名称、裂種別、時代といった名物裂としての基本情報であり、在庫管理のほかに使用時のための覚書としての役割があったと考えられる。

一方で、すでに述べたように、本資料の紙札には時代を修正したものが複数存在する。ただ単に何かに使用するために所有する裂地を管理するだけならば、時代の修正は必ずしも必要ではない。加えて、使い道がないであろう小さな断片をわざわざ保管し、情報とともに管理する必要もない。

これらを見ていると、古裂を賞玩し蒐集してきた人々の存在が浮かび上がる。そういった人々はたとえ小さな断片であっても大切に保存し、それらの裂がいかなるものかを研究しようとする姿勢を持っていた。それは、名物裂としての意識を越えた、文化財としての価値の創出であったと思われる。そして紙札は、保存のための覚書であるとともに、次第にそうした人々の研究の一助としての役割までも持つようになったと推察される。

7. まとめ

本学博物館所蔵「各種 名物裂」142点について、裂に取付けられた紙札をその紙質や記載内容、筆跡に基づき5種類に分類、整理を行い、紙札が取付けられた時期とその意図について考察を行った。

その結果、紙札の主な記載内容は①模様・②裂種別・③時代・④格付け・⑤番号・⑥掛目であり、紙札はいずれも明治時代から大正時代頃に取付けられたものであると判断した。

また、紙札は、これらの裂類が実用品としての使用が主要目的であった時期には、在庫管理や用途の記録といった保管にあたっての役割を持っていたが、文化財として鑑賞の対象となったときには、裂類の保存や研究のための情報を示すことを主たる役割とするようになったと推察される。

謝辞

本稿執筆にあたっては、終始に渡って長崎巖教授（共立女子大学博物館館長）からご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

Collection of Kyoritsu Women's University Museum

- Study of the work " various kinds of *Meibutsu-gire* textiles " : The paper tags be attached to "fragments"

MARUZUKA Kanako

Abstract:

This study groups the paper tags attached to 142 fragments of *Meibutsu-gire* textiles in the collection of the Institution's museum into five categories based on their quality of paper, content, and calligraphy, sorts them, and considers the timing and intentions of attaching the tags.

It finds that the main content of the paper tags describes the fragments' (i) patterns, (ii) types of cloth, (iii) periods, (iv) ranks, (v) reference numbers, and (vi) weights, and determines that each of the tags was affixed during the period from the Meiji Era (1868–1912) through the Taisho Era (1912–1926).

It is observed that the paper tags served in storage-related functions, such as inventory management and recording of use, in the times in which these fragments still had considerable value for practical use, and that after the fragments had become subjects of appreciation as cultural assets the tags came to serve as notes for their preservation and study.

Keywords: *Meibutsu-gire*